

このことについて、下記のとおり「麦づくり情報（第1号）」について送付しますので、業務の参考にしてください。

「麦づくり情報（第1号）」について

1 圃場の準備・・・麦の播種時期が近づいてきました、圃場の準備に取り掛かりましょう！

1) 土づくり（稲わらのすき込み、土壌改良資材と堆肥の施用）

- ・堆肥や稲わらのすき込みなど有機物の施用は地力増進や、通気性、保水力の向上に繋がるため出芽率の向上に役立ちます。

そこで、稲わらは焼却せず、圃場へすき込みましょう！

- ・深耕（目標作土深 15 cm）と適正な碎土（土塊は小さく）で根張りを促進しましょう。
- ・麦類は酸性に弱いため、麦の播種前に土壌 pH（ペーハー）を測定し、診断結果に基づき石灰資材を投入しましょう。

土壌 pH に応じた石灰資材の散布を行うことで、窒素肥料の効果不足や酸性障害を防ぐことができます。なお、元肥と石灰資材の同時に施用すると、窒素肥料の効果が低下するため、同時施用は避けましょう。

○麦類の適正 PH

品 目 名	生育好適範囲
小 麦	6.0～7.0
大 麦	6.5～7.5
(参照) 水 稻	5.5～6.5

例) 苦土石灰 → 140Kg/10a
生石灰 → 100Kg/10a

2) 排水対策（有材暗渠の増設・弾丸暗渠の縦横施工）

- ・麦は畑作物であり、水分も必要ですが、過剰であれば生育阻害の要因となり、麦踏み・土入れ等、肥培管理を徹底するためにも、圃場が乾燥していることが求められます。
- ・特に冬作の圃場は乾きにくく、排水が悪い圃場では、湿害から生育不良を招き大幅に減収してしまいます。麦の収量と品質を向上するためにも、弾丸暗渠の施工（3～5 m 間隔）など排水対策を徹底してください。
- ・まくら地は水が溜まりやすいため、麦の生育が悪い圃場が多いようです。雨水が圃場表面に溜まらないよう、作溝や弾丸暗渠を実施しましょう。

3) 雑草対策（除草剤の体系処理）

- ・同一除草剤の連用により除草剤抵抗性雑草の発生が報告されています。これまでに同一の除草剤を連用した圃場など、除草剤散布後も雑草の取りこぼしが目立った圃場では使用する除草剤の変更を検討しましょう。
- ・例年雑草の発生が目立つ圃場では、除草剤 1 回の散布では十分な除草効果が期待できません。麦の生育量確保と雑草種子の混入防止のため、下記の例を参考に体系的な防除を実施してください。

○雑草対策の例

①播種直後除草剤散布 → ②生育期除草剤散布 → ③中耕（複数回） → ④手取り除草
※難防除雑草は除草剤 1 回での除草は困難です。地道な防除で根絶を目指しましょう！

2 播種作業…安定した収量・品質を確保するため麦種ごとの適期に播種しましょう！！

1) 播種時期と播種量の目安（播種量の詳細は栽培暦を参考にしてください）

- ・播種期が遅くなると、生育遅延から収量の低下も懸念されますので、生育量を確保し収量を得るためにも、適期播種に努めましょう。

○播種時期に応じた播種量

麦種	品種名	播種時期	播種量
小麦	さちかおり はる風ふわり	11月15日～30日	5～7kg /10a
	シロガネコムギ チクゴイズミ	11月15日～30日	6～7kg /10a
大麦	サチホゴールド はるか二条	11月25日～12月10日	7～8kg /10a

- ・気象庁（11月11日発表）によると向こう1か月の天候の見通しとして、西日本における気温はほぼ平年並み、降水量は平年並みか少なく、日照時間はほぼ平年並みの見込みとされており、播種作業は例年並みに進むと推測されます。
- ・ただし、天候や作業にあわせて播種作業を実施しても、適期に播種できない場合は、苗立ち数の確保を図り穂数の減少を防ぐため、播種適期の播種量を基準として「5日遅れる毎に0.5kg/10a程度播種量の増量」を行いましょう。
- ・「サチホゴールド」で早播きすると裂皮粒の発生が多くなり、品質が低下する恐れがあるため早播きは避けてください。

2) 播種深度（砕土は細かく、適正な播種深を確保しましょう）

- ・播種は、浅過ぎても、深過ぎても苗立ちに大きく影響します。
適性播種深度である「3cm」を目途に播種作業を行い、苗立ち数を確保しましょう。

○播種深が浅過ぎる場合・・・

（ 播種後に適度な降雨があれば出芽は順調で分けつは旺盛となる。
降雨がなく乾燥条件が続くと出芽率が低下する。
播種直後除草剤の散布により葉害を生じる恐れがある。 ）

○播種深が深過ぎる場合・・・

（ 出芽が遅れ苗立ちが不足する。
分けつも少なくなり、必要穂数の確保ができずに減収する恐れがある。 ）